

産業 **Impression!**

クリス・グレンの

Past to the Future!!

オーストラリア出身で日本をこよなく愛するクリス・グレンさんが中部地域の産業の現場や遺産をめぐるります!

家の鍵や自動車、オフィス機器など、私たちの生活を取り巻くたくさんの機械や製品。それら機器の见えない部分に使われる金属部品を類い稀な技術力で生み出しているのが三重県にある高洋電機株式会社です。今回は、旋盤*による金属加工のトップランナーである同社にクリスさんが訪れ、時代を越えて紡がれているものづくり精神に触れました!

Vol. **6**

実は身近に溢れてる 金属加工の精密部品



取材協力
高洋電機株式会社

1951年(昭和26年)、高祖鉄工所創業。その後事業を継承した現会長の高祖洋氏により、1973年(昭和48年)高洋電機株式会社設立。同年、現所在地である度会郡玉城町に本社工場を移転。多種多様な顧客からの要望に応えることで、さまざまな産業の製品に同社の製品が使われている。 <http://koyofirst.jp/>

クリス・グレン

オーストラリア出身。名古屋在住。ラジオDJとしてZIP-FM「RADIO ORBIT」(日曜10:00~13:00)を担当するほか日本の魅力を伝える外国人として、NHK「プラタモリ」、NHK WORLD「CASTLE QUEST」「NINJA TRUTH」など、テレビ出演も多数。趣味は戦国時代の歴史研究、甲冑武具の収集、城めぐりなど。“日本人よりも日本人”な外国人として注目されている。
<http://www.chris-glenn.com/>



~これから~ **Future**

「日本一を目指して、海外からも注目される企業に」と高祖社長。



先人から受け継いできた
技術を次の世代へ継承する

目下の夢は大きく2つ。1つは“難削材の加工日本一”。「難しい仕事に果敢に挑戦する姿勢は他社に負けない」と社長。2つ目は“自社のオリジナル製品の開発”。自分たちがつくっているものはこれだ!といえる自社商品をつくりたいとプロジェクトが動き出しているそう。そんな夢を掲げられるのも積み重ねてきた技術があるから。「受け継いできた技術を次の世代につなげていく。それが先輩方への“恩返し”だと思っています」(高祖社長)



中心に0.2mmの真っ直ぐな穴を開け、糸を通した円柱の金属。技術力の高さがわかる。



タングステン(手前)、銅(奥)、アルミ(右)でつくった印鑑。持ったときの重さの違いに驚く。(タングステンは、アルミの7倍の比重)

エンジニア出身の社長のもと、高い技術と深いこだわりで機械部品をつくらせていることに感動!彼らのものづくりの素晴らしさに「スゴイ!」を連発してしまいました!

Amazing!

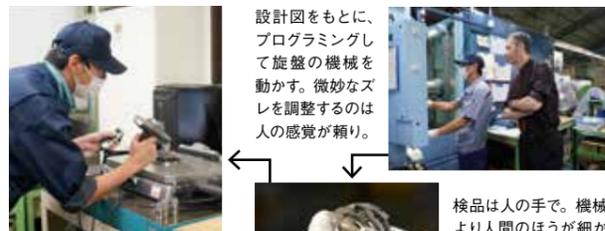
~いま~ **Now**



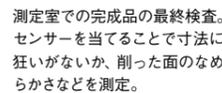
高速で回転している金属素材が削られている様子。

営業に行った先の反応で
自分たちのレベルの高さに気づく

通常、“切削”と“研磨”はそれぞれの工程が必要となる。しかし同社では切削で研磨レベルまで加工する「研磨レス加工」で、時間・コストを圧縮できる。「営業先で『それはすごいね』と言われ、初めて自分たちの技術の価値に気付かされました」(高祖社長)。このことを足がかりに、依頼があれば「とにかくやってみよう!」と挑戦。さまざまな素材・形状の加工など高難度の案件をクリアしていく。現在では、約50種類の金属を扱い、約4万アイテムが同社には登録されている。



設計図をもとに、プログラミングして旋盤の機械を動かす。微妙なズレを調整するのは人の感覚が頼り。



測定室での完成品の最終検査。センサーを当てることで寸法に狂いがなければ、削った面のなめらかさなどを測定。



検品は人の手で。機械より人間のほうが細かいところ気づくことができる。



レアメタルの一種で極めて硬いタングステンなどの難削材と呼ばれる金属の加工は、同社の得意分野。写真は、世界シェアの約6割を誇る映写機用光源の材料。

機械の正確さと人間の繊細さを合わせる技!細かい部分まで美しく削られています!

Good!

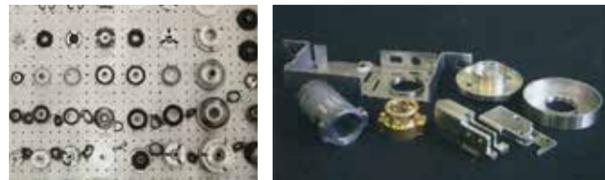
~これまで~ **Past**



現在の地へ移転して間もない、1974年(昭和49年)頃の工場内部。

災害やリーマンショック
さまざまな壁を乗り越えて

旋盤工だった初代社長・亀太郎氏が1951年(昭和26年)、鳥羽市にて創業。二度の火災と伊勢湾台風による被災を乗り越え、1973年(昭和48年)、高洋電機株式会社を設立。少しずつ事業を発展させてきたが、リーマンショックにより注文が激減…。それまで本格的に行ってこなかった営業活動を活発化させ、自分たちができることをPRし、積極的に仕事獲得に乗り出した。



移転直後に生産開始した電磁クラッチ

主力製品である鍵の部品。高洋電機の生産の8割を大手鍵メーカーの製品が占めていた時期もあった。



コンピューターがない時代は、設計から手作業。ものすごい技術ですね!

Wow!



古い旋盤の機械。今も現役で活躍中。

「昔の職人は、指先で加工品の厚さが1/10ミリ単位でわかった」と高祖社長。

「硬い」金属加工の世界に
ぬくもりと柔軟性を感じた!

どーも、どーも、どーも! クリス・グレンです。今回訪問したのは、切削加工でいろいろな金属部品を作っている高洋電機。普段、ボクたちの目には見えない細かな部品を1000分の1ミリの精度で仕上げているというから驚きです! 鍵の構造部品やモーターパーツなど、実は身の回りで多く使われていて、クルマ好きのボクも、きつとお世話になっていますね!

技術力はもちろんスゴイ! でも同じくらい感動したのは、社長の人柄や会社の雰囲気。金属加工という高い精度を求められる仕事というイメージがあり、「硬い」シビアな人が多いのでは? 想像したのですが、社長も工場のみなさんも明るくやさしい。素晴らしい技術とチャレンジ精神、そして温かみのある人間性がとても良いバランスで、楽しい時間を過ごすことができました!

ご案内いただいたのは…
代表取締役社長
高祖 雅規さん



高祖雅規さんは、2016年に社長に就任。若い頃、約1年半アメリカに滞在、その後約半年をかけて中南米を放したという。「何にでも挑戦する気持ちや柔軟な考え方は、その経験が原点なのは?」(クリス)